
弓

アミンタ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

弓

【Zマーク】

Z4508D

【作者名】

アミンタ

【あらすじ】

いつもは的を外すことの無い新三郎が、今日は少しも当りない。

戦の噂がある中で当主嫡男の矢が当らない不吉な、館の中には無言の緊張が走った……。

矢は、右へ外れた。風に流される分を見込んだが、ふと風が止んだのだ。

その前に放つた矢は、的の手前で地に刺さっていた。

先ほどから新三郎の放つ矢は、的に当たったためしが無い。使い慣れた場所であるのに、十五間先の地面すれすれに置かれたのが、いつもより遠くなつたように見えはじめていた。

昨年、十三歳で元服した際用意した弓は、彼の背丈が伸びた為十分な引きが取れなくなつていた。そこで今朝から一寸長いものに換えたのだが、今ひとつ加減が呑み込めていなかつた。

新しい弓は思つたよりも弦の返りが早かつた。

「当たりませぬなあ」と上の妹が不満げに言つと、「あたりませぬなあ」と下の妹が、回らぬ口でまねをした。上の千世は六歳。下の登代は四歳になつたばかりである。

いつもは苦も無く的を射当てる兄を誇らしく思つてゐる妹達は、今日の不手際に、しごれを切らし始めたらしい。二人は、普段は屋敷奥の中庭に突き出た母屋の縁で、お人形や飯事遊びをしてゐるだつた。それが、兄が弓の稽古を始める時々見に来ては、母親の元へ得意になつて報告に戻るのである。

新三郎は、男勝りの弓の名手といわれた母親の血を引いてゐる為か、小さな頃から不思議と勘が働いて、滅多に的を外すということが無い。それだから、一族の者やこの家に仕える古い下人達からも先々代様に生き写しだの、若様なら波栗党も安泰だのという声が聞こえて來ている。

昨年、代々国主を務めた織田宗家を倒して、波栗家や戸田、青山、蜂屋、内藤等の南尾張の諸豪族を従えた信長が、この尾張の国を統一した。

しかし、それで終わるはずはないと誰もが思つてゐるから、そろ

そろ大戦が近いのではないかという噂がもっぱらであった。事実、最近三河から戻った商人によれば、駿河では刀と米が良い値で売れるという話である。

今、波栗一党を率いている新三郎の父、次郎左衛門宗重はこの地の名門堀田家から婿に入つた人である。一族の結束を高める上でも、最も正統な後継者である新三郎に対する周囲の期待は並ではないものがあった。それは、当人の新三郎もよく承知していることだつた。彼は、誰の目にも恥ずかしくない腕前を常に示さなければならぬと、いつも自分に言い聞かせていた。

ところが、今日に限つて急に矢が当たらなくなつたのである。戦が近いかも知れないのに、普段は上々の腕前を見せる宗家の嫡男の矢が当たらないのだ。

弓は古代から神聖な武器として扱われて来た、いわば武家の象徴である。その上、戦では神仏の加護が大事とされている。

普段の稽古と言つてしまえばそれまでのことだが、吉凶などと言う意識が家中に広まるに厄介なことだった。

氣のせいか、館は奇妙なほどに静まりかえつていた。

矢場は、厩のある広い裏庭の中ほどに、竹林に面した土墨に向けて設けられている。特に見ている訳ではなくても、家の用事をしている者達からは、的が良く見えているはずである。庭ではいつも五六名の男たちが馬の世話やら武具の手入れやらで立ち働いている。そこへ母屋の下働きをする女たちが加わるから、普段はかなり賑やかである。

新三郎は、思わず庭に出ている男や女達を見回した。

しかし、誰一人こちらを向いている者は居なかつた。皆其々の持ち場で一様に目を伏せて、そ知らぬ顔をしている。だがそれは却つて、彼らの意識が新三郎に注がれていることの証でもあつた。

次こそは。

新三郎は鼻で深々と息を吸い込んでから、弦を大きく引き込んで、また放つた。

すると、今度は上ずつて後ろの土壘の小石に当たり、砕け散った土の破片と共に、跳ね返されてよろよろと地に落ちた。

新三郎は色を失つて立ち尽くした。

本来なら矢をいま少し重いものに換えるべきであったのだ。
これには妹達も流石に驚いたらしく、こんどは何も言わずに下を向いてしまった。

まるでその場の人々の動搖を察したかのように、ちぎれ雲が日に照らされて、陰を作りながら新三郎達の上を横切つていった。

「おお、上達なされた。良い形でござるな」

突然の太い声に、驚いて振り向くと、盾のようすに角ばつた肩をした大柄な老人が立っていた。

「よろしゅうござる、よろしゅうござる」

老人は、慌てて向きを変えた新三郎を制するように、両の掌を広げながら言った。

新三郎は、一族の長老を威儀を正して迎える姿勢をとつた。その波栗新五左衛門頼忠は先代の当主、四郎次郎宗政の弟であり、近隣に聞こえた武勇の将でもある。

もう七十歳を超えていると思われるのに、鋭い眼光と大きな口が、向かう者にまるで大波が押し寄せるような威圧感を与えている。

新三郎は、前に歩こうとして、思わず足が竦んだのが分かつた。

「いや、良いのでござる。お續けになられるがよろしく」

「……」

「ちと、次郎左衛門殿のご機嫌伺いに参つたまででござる」

老人は、くるりと向きを変えて、すたすたと母屋の方へ行つてしまつた。

叔父上様は、それがしの腕前を疑つてはおられぬ。

新三郎は、ふと肩の力が抜けたように感じた。

何ほどのことともないではないか、新しい弓が少しばかり元気が良いだけのことだと新三郎は思い直した。

空の高い方は風が強いのか、切れ切れに固まつた雲が、流れるよう動いている。初夏の日が、綿のようなこんもりとした雲から顔を出すと、建物の屋根や地面から強い日差しが跳ね返つて、あたりが一層明るくなつた。

新三郎は、矢立てからやや太目の矢を選んだ。

先程までは気が付かなかつたのだが、今は頭上を行く鳥の動きもはつきりと脳裏に描かれている。

彼は、ゆっくりと息を整えてから、弓を少し軽めに引くと、静かに矢を放つた。

今度は、的の中央から上へ、半分くらいに当たつた。

一同から、「おお」と静かな歓声が上つた。

妹達の眼がきらきらと輝いているのが分かつた。

先程まで、荒馬がいきり立つてゐるかのように思われた弓が、今は新三郎の手に静かに納まつてゐる。

それからは、矢は面白いように次々と当たつた。

幼い妹達が、嬉々とした表情で母屋の奥へ駆け込んで行くと、館にはいつものざわめきが戻つたようであつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4508d/>

弓

2010年10月8日15時31分発行